

だった。人のことなど振向く余裕もなく、がむしやりに自分の生活を守って来た。そんな訳で先生と私との間には何のか、わりもないかの如くであった。そんなある日、先生は田中氏を通じて岩波国語読本の教授参考書を借りたいと言って来られた。幸い持合せて居た二三冊をお借しした事だった。何でも新しい教科書を編纂されるとか云う話であった。それきり忘れともなく忘れて一年ほど経ったある日、突然先生の来訪を受けた。自身で参考書を返しに見えたのである。先生の几帳面さに今さらながら感激し恐縮した次第である。教科書の方は或る事情で逐々出さ仕舞だつたとか聞いた。

先生が学界で華かに活躍して居られるのを仄聞しながら十年一日の如く中学・高等学校で教鞭を執っている間に二十五年が経ってしまった。さしにも新陳代謝の劇しい高・中で久しく第一線に居た自分にも天人の五衰？が訪れる日が来た。同僚九人と共に配転されて大学の図書館に勤務する身となった。劇しいコンプレックスや自己の懺悪と闘いながら色とりどりの若人達の中に交って働きつつ、老醜の次第に露わな自分を省みる時、私の氣

持は悲劇的であった。絶望的でさえあった。ある老先生は路上で出会った時、虚心に大学に来た事を報告し御挨拶しようとした私を避けるようにさせられた。逃げるようにバスに乗って行かれる先生の表情には明かに狼狽と固い拒非の氣持が読みとれた。私は落目になつた者へ接近する事によって自己の保身に危険を感じての行為と老教授の行いを憶測しひがむ前に自分自身の中に内抱する弱点(それは極度のコンプレックスと自虐の果てに人を近づけさせない一種の妖気の如きものとなつて私の身边にまつわりついて離れないもの)に氣付いて慄然とした。

そんな暗い思い出の日からでも早五年経つ。私は私のストラップを脱け出すために私なりの努力をした。友人や先輩の二三の方々からも温い援助を得てやうと立ち直りかけた或日のこと、勤務を終えて帰りがけ、同僚を待つて校庭のベンチに腰を下している自分につかつかと近寄って来られたのが清水先生であった。

「近頃はどうですか。あちらに居た時と氣分はちがいますか。」と云つた意味の一言二言であつたがそれがその時の私にとってじゝなで食べるには。」とおっしゃる。ぼくは見当違いにドギマギして尋ねた。

サンボウカン
大上 敬義

「きみ。サンボウカンを買ってきてくれませんか。」

法文学部に創設の文学科国文学科に入つてもなく、主任の清水先生からこう言われたの突差に、(大学教授が学生にサンボウカンを買いにやらせてどうするのだろう。研究室でも食べるツモリかな。それにしてもチョット変わつてゐるな。)と思つた。直感的には「カン」のひびきで食べ物ということはピンときたが、それがヨウカンの類かミカンの類か。第一、サンボウカンをぼくは知らない。

「サンボウカン? てなんですか。」と聞く先生は困つた風に、それでもにこややかに手まねをつけて。

「ほら、夏ミカンの一種で、甘いがあるでしょう。あれですよ。あれを五つ六つ。」と財布をお出しになる。

「そんなに沢山?」と、ぼくがオカネに驚くと先生は少し照れて、「少ないかな。みんな

んと胸に迫る力を持つて居た。私はその時先生の温い氣持は充分汲みとれてはいながら「住めば都ですわ」等と強がりめいた言葉をつぶやいて御別れした事を今さらながら申し訳なく思っている。

今年の四月であつたか、五月であつたか、先生が突然図書館に見えた。先生が定年になられた事の御挨拶に見えられたようなのでしばらく話して居る中にふと鞆の中に持合せていたのを思い出して、私の貧しいライフワーク「歌集いしづみ」を遅ればせながら差上げた次第であつた。

先生につながる思い出は三十年間の学園の消長と関聯して未だ未だ尽きない。先生に教えられる所は多々あるが、然し私は私の道を歩くしか仕方がない。寂しくても、心細くても、ゴーイング・マイ・ウェイである。恐らく先生も同じ思いで居られることだろうと思ふのである。

ぼくは小説家になりたいといつたら早速、

「学校だけはサボらないようにしなさいよ。」と先生が凶星をされた。ぼくはいつべんに舌がもつれ胸が詰まって座り込んでしまった。本当はサボル魂胆だつたのが、先生のひとことで、(これはエライこつちや。)と思ひかけるようになり、思わず「ハイ」と子供みtainな返事をしてから、(サア大変と)先生を見ると例の半泣きみたいなやさしい顔でぼくを見つめられる。ぼくは急に自信を失なつて登校しないと不安でしかたがなくなり、毎日、それも早い目に家を出ては大学の周辺を歩き廻つた。サボロウとする氣持がわくと先生のひとことがこの時の突顔と共に浮かびあがってくるのである。妙なことになつたものだが、おかげで食うや食わずの三文文士にはなり損ねた代りに、学校勤めをしていられるのにもこの時の耳学問が大いに役立つ結果となつた。

卒業前から中学に奉職する際にも先生の御紹介にあずかった、不肖のぼくは一向御無沙汰失礼ばかりしてきてしまつた。役員後、小泉先生のお口添えて当時の初音書房から処女

詩集「愁ひの実」を出してまもなく、先生の方からお祝いのお言葉を頂いた。

「今日は市電の車中で貴君の詩集を読んでいる人を見かけてうれしく存じました。いい本ができましたね。本学からも一人ぐらいい詩人が出てほしいと存じました。」とのお便りに、ぼくはすすんで先生に献本しなかった理由を見つけて恐縮する弱気を取り戻した。今度は勤め先の(学校だけはサボらないようにしなさいね。)といわれることが辛かったのである。それに今度は大学と違って、ぼくは時々学校をサボルだけでなく、二度も、案の定、学校をやめては京都で一度、東京で一度、放浪生活、居候生活を繰り返し、妻子を置き去りにする悪癖が一応納まったかと思うと、今の学校(県立奈良商工高校)に八年も落ち着いたものの、やっぱり時たま、気づい気ままのルンペン癖が出てきては周囲を困らせ呆れられる台風が心から体を荒らして吹き抜ける始末である。

こんなものをお目にかけると先生にはいつまでも御心配の種になるばかりだが、不肖のぼくにはこれが精いっぱいのところである。

今ぼくは国語の乙で堤中納言物語をやって

いる。先生の評釈をたよりに、うまくいけばいくで、グッと詰まれば詰まるで、一層先生がなつかしい。そしてサンボウカンの頃がなつかしい。それにしても思えば思うほど先生にあわす顔のないことばかりである。気まま

の天罰で前歯を欠き、不惑を越したばかりにもかかわらずぼくは老いた。ぼくが老いると自分の気ままは棚に上げ、あつかましいウヌボレから自分を推して先生の頰輪を察するといふ無礼な暗算が働きかける。これは逆縁の凶兆であろう。願わくはそうあってほしい。いつまでも先生がお元氣であると安心して、ぼくの方がお先へ失礼したいと思われる。

「若い時分には、こう見えても血氣盛んで、これで随分ケンカもしたことがあります。」と講義のあいまに聞いた先生の想い出話が想い出になる。十八のもの昔の話。清水中納言物語のロマンスを聞きのがしたことだけが、時代からといはいながら、今にして想えば千載に悔いが残る一大痛恨事である。朝日新聞の「生活のうた」がキツカケとなつて、ぼくは今、地元の大和タイムスに今年いっぱいこの予定で「くらしのうた」を書いて

いる。この連載が終ると単行本になる手筈だが、今度は地方紙という特殊事情は別として、日々の明け暮れに追われる一喜一憂を、小説家志望後日談報告代りに進んで御一読願いたいと甘えたくなる。

サンボウカンから始まった先生とのつながり、ぼくにおいて、先生のお気持を曇らせる結果となったが、ぼくにはあの、サンボウカンの淡い甘みが、無味乾燥の時代の甘露として、ともすればヒズミがちな暗い世相に押しひしがれてきた中でも、負けながら惜しみたいもののあわれの香気を放つてくれる。

清水先生の思い出

滝 典 通

烏兔々々などという言葉が漸く実感となる年齢になった。清水先生の還暦祝いがつい此の間であつたと思うのに、早くも定年御退職のこと。私が先生に教えを受けた頃は、あの悪夢のような戦いの終盤であつた。先生はその頃文学部長をなさっていられ、後藤先生や

今や故き小泉先生と共に、はげしい食糧の中でもすれば失われ勝ちになる我々の学生の学問への情熱をもえ立たせて下さった。今でもはつきり眼に浮ぶのは、同窓の辻正一、森下幸男両君が応召した時、先生が涙をたたえて激励なさった恩顔である。戦いが熾烈を極めた頃、私は勤務校の児童に付添って、香川県綾歌郡の白峯御陵の麓松山村に集団疎開し、そこで卒業論文を書いた。その頃先生と後藤先生の御二人が白峯に一度行くから案内せよとのことで、心待ちに楽しんでしたが、それも相次ぐ空襲で実現されずじまつた。

今でも残念に思っている。

私自身は卒業後京都に帰り健文社に勤めて大学の研究科に籍を置き、戸田茂睡の論文を書いたりしていたので、先生に引きつづいて種々御指導を仰いだ。田中野神町の御宅へも何回か御邪魔した。乏しい戦後の食糧事情の中で、配給のビールの御馳走になったりした。その後私は家の都合で郷里に帰り高等学校に奉職し、以来十数年貧乏暇なしで先生に御拝眉の機を得ない。その間、小泉先生は追放で去られ、後藤先生も又大阪学芸大に転ぜられた。文字通り立命館学部の支柱となつて

後進の持導に生涯を捧げられた先生が、いよいよ定年御退職なさることは我々にとって誠に感慨無量である。私は先生がいつまでも御健康で、堤中納言物語などの特色ある御研究に裕々御余生を楽しまれることをお祈りして止まない。同時に、かつて果さなかつた白峯行に是非機を見て、後藤先生と御一緒にお誘い致し度いと念願している。

清水泰先生のこと

妹 尾 権

この春、恩師清水泰先生が立命を去られた時、私には一入感慨深いものがあつた。

戦後、私の郷里に大学が新設され、この文学部主任教授として赴任されるといふ新聞を読んで、先生のお宅へ伺つてその話をした時、先生は立命を決して去らないという御意志の堅さに、いかに立命を愛されていられるかを思い知らされたのである。

思えば、その時の御意志のままに、三十四年の長い年月をひたすら立命のために尽くさ

れながら、しかも、その業績は、ひとえに立命内にとどまることなく、日本の国文学会に大きく寄与された、偉大なわれらの清水先生を、母校立命から失うことは、何としても残り惜しいことであつた。

考えてみれば、卒業生にとって学校とはおかしなところで、母校という感じだけあつても、年が経つに従い恩師が去り、校舎が変わり、そこに誰一人知らぬ者ばかりとなれば、現実にはやはり異郷の感はまぬかれぬ。私にとつて、母校立命は清水先生と共にあつた。身勝手な言い分ながら先生のいられない立命は、考えられないと言つても過言ではない。その清水先生が立命を去られたのである。

国文学界における堤中納言物語の権威者としての先生は、私の言を俟つてもなく、余りに著名であらう。

先生のすぐれた識見は、この堤中納言が平安時代から鎌倉時代にかけての文学作品、源氏・枕と共にすぐれた作品として挙げたい旨「詳解」に書いておられる。また、王朝の文学は、結構の大であり、行文の優雅典麗であり、構想の奇抜なものなかにあつて、こ